

19世紀フランス文学におけるオリエンタリズム (研究序説)

竹 田 英 尚

L'orientalisme dans la littérature française du XIX^e siècle (un plan d'études)

Hidenao TAKEDA

オリエンタリズムという語は言うまでもなくオリентという地理的名称にもとづいている。したがって、後者についての理解の仕方をのべながら、研究テーマの説明をはじめるのは、ごく常識的な順序であろう。と言っても、地理学者でも歴史学者でもない私は、用語の定義には関心がないのみならず、結論からのべるならば、そもそもオリентや東洋という語は、どの程度正確に地球上の地域に対応しているのか疑わしい。一方ではこれらの語の曖昧な包括性について、他方では、そこに含まれている中心と周辺について明瞭に自覚しておくことが、一番重要であると言えよう。

私にとっては、オリентという語からまず思い浮かべるのは中東のあたりであるが、東洋という語はなぜか先に中国や日本を連想させる。もちろん、わたしのこの習性はまちがいであり、カタカナが漢字に変わったとき、無意識的に中心と周辺が入れ替わる癖がついたのであろう。こんな私事に言及したのは、おなじような誤りによって無意味な空論におちいっている場合も、少なくないからである。

近東、中東、極東の名称にふくまれている「東」は東洋であり、欧米の言語ではオリентにあたる。それは指摘するまでもないほど単純な事実であるが、しかし、これらの語がヨーロッパを視点にした呼称にすぎないという点には、つねに注意がおよんでいるとは言えない。さらに、また、ヨーロッパ人の意識からすれば中国や日本が東の果てなのは分かりやすいが、一方、オリентはどこから始まるのであろうか。近東という名称は、古くはバルカン半島一

帯を指し、やがてトルコ、シリア、パレスチナ、アラビア、エジプトなどの東部地中海沿岸をふくむようになった。では、これらの地域から日本までをオリентと理解すれば良いのであろうか。問題はそれほど単純ではない。

1920年にチュニスにユダヤ人の子供として生まれたアルベール・メンミは、反ユダヤ世界におけるユダヤ人、植民地における土着人、ヨーロッパ支配下におけるアフリカ人という二重、三重に差別されていた原体験を見つめながら、作家活動をつづけた。彼の処女作であり、自伝小説である『塩の柱』において、彼はオリентの人間という烙印を背負わなければならない宿命をも描いている。そこには、彼がユダヤ人であったばかりではなく、チュニジアの人間であるという理由もからんでいたはずである。つまり、地中海南岸におけるオリентはエジプトから始まるのではなく、西端をモロッコとする北アフリカ一帯もふくまれているかもしれない。そもそもオリентというのはヨーロッパ人の意識にもとづく名称なのであるから、このように広く理解するのが正しいのかもしれないのである。あるいは、たとえばギ・ド・モーパッサンのマグリブ地方にたいする思いは、ロマンチズムの作家たちのオリентにたいする感情とどのように類似し、どのように異なっているのであろうか。ドゥニーズ・ブラヒミの編んだ本は、その問題を検討するために簡単に利用できる一つである¹⁾。

さらには、オリентがいつそう広い範囲を指すときもある。オリент学者たちがアフリカ全体やオセアニアにまで研究を発展させるにつれ、境界はこれらの方面にまで広がっていった²⁾。すこし考えなおしてみるならば、それは当然の結果であるとも言えよう。もともとオリентとは特定の地域を指す語ではなく、東の方の非西洋世界を漠然と意味していた。また、「東の方」という条件は、主として、キリスト教における歴史的な理由から生じたのであり、近代ヨーロッパ人の心理においては「非西洋」が意味の主たる構成要件なのかもしれない。南北アメリカ大陸はヨーロッパが新たにふくみこんだ新世界であり、これらの地方を除く非西洋世界がオリентという語のなかに組み入れられていったとしても不思議ではない。オリентという語は、その曖昧で捉えがたい性格に依拠しながら、たんに非西洋を暗示するのが中心的な機能なのかもしれない。オリエンタリズムの研究は、そのようなメカニズムにも注意が向けられなければならないであろう。

東洋とかオリентという語がそれほど曖昧な意味しかもっていないのならば、研究においてはこれらの語を使うべきではない。このように主張する人もいるかもしれない。あるいは、オリエンタリズムというのはさらに曖昧な語であり、正体のないものを研究しようとするに等しいとも言えよう。しかしながら、もし正確な地理上の名称に細分化するならば、歴史的に私達を操ってきた重要な観念の一つが捉えられなくなる。一方では、西洋人も東洋人もふくめ、大多数の人々の意識のなかでは、オリентはちゃんと地球上の人間と国々に対応する、明確な実体をもったものであるかのように存在しつづけてきた。しかも、まるで統一的な性格を

もった人間と国々の集合体であるかのように信じられてきた。たとえば、G・B・サンソムの『西欧世界と日本』を開いてみよう。³⁾第1部第1章序論において、著者はヨーロッパに対してアジアという語を使いながら、両者の文化的、経済的、政治的個性を論じている。私達はそこに、両者それぞれの統一的な性格と互いの際立った相違とについて、伝統的な定義を見出すことができる。オリエントにしる東洋にしるアジアにしる、人間の認識にとって気が遠くなるほど広大であるにもかかわらず、一方では西洋対東洋という種類の比較が、まるで正確で堅固な基盤にもとづいているかのように論じられてきた。そして、長い間わたしたちを支配してきた。これらの語の曖昧な包括性が同時に超越的な統一性を放射しながら、強力な影響をおよぼしつけてきた。そのような作用のメカニズムに注意をそそぐならば、「オリエンタリズム」は、地理上の曖昧な用語にさらにイズムを付加してはいるが、人間の意識と観念のありようについての研究テーマになりうるはずである。

オリエントという語の特徴として、曖昧な包括性と超越的な統一性にくわえ、そこにふくまれている中心と周辺を基本的に押さえておくことも必要であろう。

簡単に歴史をふりかえてみると、ヨーロッパ人の意識のなかにおけるオリエントの中心は、近東から中東を支配しているイスラムの帝国であり、四大文明の発祥地の一つのインドでもなければ、ましてや極東の中国や日本ではなかった。ヘブライ語、アラビア語、カルデア語などの講座は、すでに1312年のヴィエヌ公会議の決定により、パリ、オックスフォード、ボローニャ、サラマンカの各大学に設けられることになった。その目的は東方の人間を改宗させる宣教師を養成するためであった。しかし、中世におけるオリエントの概念とイメージについては、一つの論文を紹介し、⁴⁾先を急ごう。

いわゆる大航海の時代は、ヨーロッパを包囲し、閉じこめているイスラム勢力にたいする反撃の開始であり、それを続行した時代であった。大航海によって、旧来のイスラム帝国の支配下を越えた地域にまで進んで行きながら、つねにヨーロッパ人の心には、イスラムにたいして反撃をおこなっているのだという意識が強くあった。たとえば、岩波書店の大航海時代叢書第I期と第II期におさめられている資料の多くのなかに、それを読みとることができる。

しかし、ヨーロッパを脅かしつづけているイスラム勢力は容易には衰えなかった。オスマン帝国の脅威は17世紀末までキリスト教文明に不安な影を投げかけていた。ピエール・マルティノの言うように、主として「この永遠の敵」にむけて東方研究の関心がそそがれたのも、⁵⁾当然の結果であった。

おなじくマルティノによるならば、18世紀に入ると、3冊の大作が日本と中国についての知識の源泉として有名になる。中国についてはデュ・アルドが1735年に、日本についてはカンプフェルが1729年に、シャルルボワが1736年に出版した本がモンテスキュー、ボルテール、

ルソーなどを初めとする哲学者や小説家や歴史家たちに利用された。しかし、日本や中国がオリエントの中心にとって代わったとは、とても言えないであろう。18世紀にはオリエントの言語の研究がふたたび盛んになったのであるが、その中心であるコレージュ・ロワイヤルにおいては、アラビア語の講座が二つに増え、トルコ語とペルシア語が追加されたにすぎなかった。⁶⁾

時代がさらに進み、いわゆる帝国主義の時代に移るにつれ、インドから中国にいたる地方もヨーロッパ列強の現実的な関心の的になる。領土を獲得し、支配しようとする欲望を背景としながら、調査や研究や思想的解釈の対象となる。しかし、衰退したオスマン帝国にたいしても、ヨーロッパのおなじような欲望が向けられていた。オリエント全体にたいするヨーロッパの態度に初めて共通性が生じたとは言えるかもしれないが、その中心が中近東からさらに東に移ったと見なすことはできない。19世紀のヨーロッパにとって国際的にもっとも重要であった「東方問題」は、バルカン半島から精々ペルシア湾までの範囲であった。文学のオリエンタリズムとして有名なのは、ロマンチズムの作家たちのオリエントにたいする関心であるが、彼らの視線は主としてイスラム世界に向けられていた。したがって、ハッサン・エル・ヌティーが書名に「近東」を使っているのに対し、クロディーヌ・グロシールは、本文中ではオリエントという語を完全に排除できないにしても、書名には「イスラム」を選んでいる。⁸⁾それももっともであると言えよう。

一言でまとめればまったくの常識にすぎないかもしれないが、ヨーロッパ人にとってオリエントの中心は宗教的にも、文化的にも、政治的にもイスラムであった。そして、その周辺に他のオリエントの地方が付加されていった。18世紀に中国がフランスの知識人の関心をひいたとき、ドゥ・ギーニュとデソトレの間で、中国人はエジプト人とおなじ起源の人種かどうかについて議論がくりかえされた。⁹⁾このような論は、新しい知識を旧来の体系のなかに組み入れようとするときに起こる現象であり、オリエントの中心と周辺をよく表している。あるいは、クロード・ファレルの『戦争』（1909年出版）は、日露戦争前後の日本を描いた小説なのであるが、内容は作者の知識がけっして粗雑でないことを示している。しかし、私のもっている版では、¹⁰⁾ファレルが付した序文の日付はイスラム暦になっている。オリエントの中心はどこであるかを象徴的に表していると言えよう。したがって、わたしが今後論じようとしているのは日本や中国にたいするオリエンタリズムであろうと、ヨーロッパ人のイスラム観をまったく無視するわけにはゆかない。たとえばクロード・リヨジュ¹¹⁾やダニエル・レーグ¹²⁾などの著作にそれを学びながら、両者の共通性と相違点についても注意を配らなければならないであろう。

研究テーマについてのべながら、以上の論述との関連を捉えなおしてみよう。わたしが今後資料に選ぶのは、フランス文学のなかで日本を描いた作品がほとんどである。この特色にもとづくならば、「オリエンタリズム」という語は広すぎるのであり、むしろ「ジャポニスム」

という語を使うべきであるかもしれない。しかし、ヨーロッパ人のいっていた諸観念の複合体において、他のオリエンタリズムと明確に区別しようようなジャポニズムの領域が存在していたのであろうか。それは肯定するにしても否定するにしても、簡単には断言できないが、私見としては、日本に題材をとった作品をただ日本との関連においてのみ分析し、評価するのは、弊害が多いと思っている。20世紀初頭までの歴史の流れを考えるならば、ヨーロッパ人のオリエンタリズムのなかに置きなおすことなしに、その作業はすすめられないであろう。いわゆるオリエンタリズムというものの包括的な曖昧さや超越的な統一性や中心や周辺について明瞭に自覚しながら、広い視野のなかで日本に関する作品を検討しなおす過程がふくまれていなければならないであろう。

また、わたし個人の現在の興味としても、たんに個々の作家の日本趣味のようなものではなく、長い間わたしたちに押しつけられてきたオリエンタリズムという諸観念の複合体を解説してみたいと思っている。中国に関する作品を補完的にとりあげようと決めたのも、そのためである。作品分析において日本にのみ注意が奪われるのを避けるために、この追加的な処置は無益ではないであろう。つい最近までは、日本はオリエンタリズムの端の端の小国であった。何と言っても、極東の代表は長い間中国だったのであり、日本と中国との混同がまじっていることは十分にありうる。一方では研究として可能なように焦点を絞らざるをえないが、他方では、狭い地域についての文学作品を資料にしたオリエンタリズムの考察が、どの程度有効であろうかとも反省してみなければならない。前述したような研究書を利用するのみならず、中国に関する作品を分析にくわえるのも、効果的なその一つの方法であろう。

さらにまた、日本や中国を描いている作家が他の国についての作品も残している場合には、参考のため分析してみるつもりである。というのは、しばしば作家自身がオリエンタリズムと同じような広がりをもっているからである。もっとも有名なピエール・ロチにしても、日本以外を舞台にした作品が多い。たとえば『アジャデ』と『東洋の幻影』はイスタンブール、『ロチの結婚』はタヒチ島、『アフリカ騎兵』はセネガルがそれぞれ舞台になっている。ジュディット・ゴーチエは執筆を中国と日本に集中させた作家であるが、『イスカンダル』ではペルシャに題材をもとめている。SF冒険小説作家として世界中に名を知られているジュール・ヴェルヌは、一方では、作品のなかに非西洋世界を組み込もうとしている。日本に関する記述をふくんでいる『80日間世界1周』は、近東から極東にいたる国々を描き、特徴づけながら、ヨーロッパと北アメリカの西洋世界の間にオリエンタリズムを包みこもうとしているとも言えよう。『中国におけるある中国人の苦難』（邦訳書名『必死の逃亡者』）は、太平天国の乱の後の中国を舞台にした小説であり、主要人物も中国人ではあるが、作者の叙述の仕方と3人の欧米人登場人物とのからみのなかで、中国の文化と国民性が印象づけられている。『バルサク調査団の驚くべき冒険』（邦訳書名『サハラ砂漠の秘密』）は、コナクリからホンボリ山脈にかけてのブラック

アフリカに冒険がくりひろげられる。しかし、黒人は選挙権や被選挙権をあたえられるほど文明化しているかどうかを調べるのが、調査団の目的であり、空想の地域以外はフランスの植民地である以上、無色透明の冒険科学小説でありつづけることはできないと言えよう。

研究対象とする時代は、1800年から1925年を基本的な範囲とするつもりである。大航海時代叢書の全巻を読み、分析しながら、ヨーロッパ人が非キリスト教世界と接触するなかで紡ぎだしてゆく諸観念の複合の様式に興味をもった私は、ヨーロッパ人の外国観の基底をなしている、現代にもっとも近い時代について、いつか調べてみたいと思っていた。そのプランの中に日本を含め、私の専門であるフランス文学という条件をくわえたとき、今までに出会ったもっともふさわしい先達はシュウォーツの著書¹³⁾であった。1800年から1925年というのは、彼の切りとり方である。彼はこの期間をさらに四分し、四つの章を対応させて論述をすすめている。そしてそれらの区分は、空想的なイメージから学問的な認識へ発展したという結論に通じている。わたしの関心の方向と構想はちがっているが、研究対象とする時代の基本的な範囲は先達に従うことにした。フランス文学史の本では知ることのできない多くの作品について、シュウォーツは地道に調査を遂行している。わたしの研究の出発にあたって、十分に依拠するに価する業績である。

しかし、オリエンタリズムの生成発展ではなく、その概念とイメージを研究テーマとするならば、対象となる時代は上記の範囲でもおのずと19世紀後半から20世紀初頭が中心になるであろう。同時代に名の知られた、影響力のある作家の作品はこの時期に書かれたものが多く、近代におけるオリエンタリズムが最後の磨きをかけられ、完成されたと推測されるからである。現代の日本にたいしても、この時期につくられたイメージをとおして見ているときが少なくないようである。鎧兜をつけたサムライの日本人がオートバイに乗って突っ走っている図は、フランスにおいても貿易摩擦関連の記事や雑誌に好んでつけられる漫画である。貿易摩擦の根本は文化摩擦であるという見解が正しいとしても、一方では、正しかろうとまちがっていようと、過去にいただいたイメージにあわせて文化摩擦に還元せずにはおかない社会心理的因子が存在している。宮本武蔵の『五輪書』さえ仏訳されているが、それはこの書の読解によって、日本の経済成長と海外発展の真髄を捉えられるという意見が流布したからである。日本の発展を推し進め、担った人間たちが、数百年以前のサムライと共通したところがあるかもしれないのは否定しないが、しかし、それ以前に調べ、見つめ、分析しなければならない現実問題はたくさんある。多くの人たちは内部に蓄積された固定観念にあわせ、ものごとの「本質」を「根本的に」理解したと信じたがる傾向がある。したがって、19世紀に形成されたオリエンタリズムの研究は、現代を動かしている過去の諸観念から解放され、未来に向けた自由な精神を回復することにも通じている。

次に、オリエンタリズムという語の使い方について、わたしの立場をのべておこう。先ほど触れたように、わたしは大航海時代叢書を読みながら、外国について書くという行為がふくんでいる、さまざまな意味あいに関心をもつようになった。それをここに述べているようなテーマに明確化¹⁴⁾してくれたのは、サイドの本であった。したがって、基本的には彼の見解を継承している。また、厳密に語の定義をするために時間と労苦をさくのは、わたしの主義ではないのであるが、この語については、みずからのテーマを明らかにする一環として説明すべきであろう。

言語、歴史、宗教、芸術、風俗等々のオリエントに関するすべての学問を指示するのが、オリエンタリズムという語のもっとも狭い意味である。しかし、たとえ学問であろうと、とくに人文科学や社会科学においては、純粋な客観性にとどまりつづけることはできない。たとえば、事実になんら反していないとしても、どの側面に焦点をあてるか、何を詳しく叙述するかなどが異なっただけでも、情報の受け手の印象はちがってくる。また、学者の関心の方向や研究テーマの傾向は、たんに個人のみならず社会や国の時代々々の特徴にも左右される。まして学会から外へ、一般の人々にむかって知識が広められる過程においては、多様な性格をふくんでいる事実の側面の一面的な選択、単純化、誇張などがともなうのは珍しくはない。これらの行為もまた個人と社会全体とのからんだ、歴史的、国家的な特徴に影響されている。情報の受け手も、おなじような要因に突き動かされている。さらには、東方趣味が流行になったときには、恣意的な選択、単純化、誇張などがいっそう甚しくなるであろう。

したがって、オリエンタリズムは曖昧な用語であると非難するのは、正しいようであって、そうではない。今略述したように、現実の人間の知識も意識も言語も、曖昧でしかも連続した広がりの中に存在しているからである。オリエントに関する知識や観念の総体をオリエンタリズムという語によってまとめるのは、むしろ、人間と社会の現実に相応していると言えよう。私はこのような広い意味で使うのを原則とするつもりである。しかし、同時に、文学作品が含み、広めたオリエンタリズムに焦点をしばるのが、わたしの研究テーマである。作家は学者たちによって歴史的に蓄積された知識にもとづきながら、自己自身と社会の欲求にあわせてオリエントの諸要素を選択し、作品のなかに配分し、印象的な像と鮮明な観念をあたえる。論文より文学作品のほうが、オリエントのイメージを植えつけ、広める、より大きな力をもっている。あるいは、いろいろな作品のなかにくりかえし表現されることによって、権威的な固定観念ができあがる。そして、他の諸側面は無きに等しいものに矮小化される。今日のようにマスメディアの発達する以前においては、文学がオリエンタリズムの形成に影響した力は、けっして小さくなかったはずである。「文学のオリエンタリズム」は文学の研究としても、社会の意識の研究としても重要な意義をもっている。

文学の社会的な機能が研究テーマに関連するのならば、19世紀という時代からしても、植

民地主義文学にも注意をくばるべきであろう。外国について叙述し、描くという行為は、作者の属する社会や国家にとって好都合な単純化や強調や誇張と無縁ではない。意識的にしろ無意識的にしろ、そのような文章がアフリカやオリエントにたいする征服と支配を正当化するのに貢献する可能性は十分にありうる。ドゥニーズ・ブラヒミは、ピエール・ロチについてエキゾチスム小説から植民地小説への推移を論じている¹⁵⁾。あるいは、中国を描くときには必ずといってよいほど阿片を吸う習慣が織りこまれる。ヴェルヌの『80日間世界1周』（1873年出版）では、ホンコンにおいて刑事のフィックスが主人公フォッグと従者パスパルトゥーの出発を妨害する策謀は、阿片をつかって実行される。第19章に挿入されている阿片と中国に関する記述は、つぎのようになっている。

フィックスとパスパルトゥーが入ったのは、阿片と呼ばれるあの呪わしい薬の喫煙所であった。そこに通う、病み呆けて、痩せ細った哀れな者たちに、がめついイギリスは年に2億6000万フランを売りつけていた。人間のもっとも忌わしい悪徳の一つにつけこみ、悲しむべき暴利をあげていた。

中国の政府は厳しい法律によってこの悪習をなくそうとしたが、効果がなかった。阿片の習慣は、最初は富裕な階層に限られていたのだが、やがて下層の人間にまで広がり、もはや蔓延をとどめるすべがなかった。中華帝国においては、今では時と所をとわず、阿片¹⁶⁾が吸われている。

中国との貿易が輸入超過であり、決済に大量の銀を払わなければならない事態を打開するために、イギリスがインドの阿片を密輸同然の方法で売りこみ始めて以来、中国の消費量は急増した。中国政府の厳重な防止策も効果がなく、阿片戦争後はさらに増加しつづけた。このような歴史的な経緯を思い出すならば、上のジュール・ヴェルヌの記述について、イギリスが阿片の蔓延の元凶である側面の書き方が不十分であると批判できないわけではない。しかし、私はそのような立場はとらない。ヴェルヌは前半部の段落において阿片貿易の元締めであるイギリスに触れているし、後半では阿片をなくすための中国政府の努力ものべている。いかに簡単であろうと、このように社会的な背景を記している文章はむしろ稀であり、多くはたんに阿片の効果や吸い方の習慣やその蔓延ぶりを描くのが普通だからである。「中華帝国では、富裕な階層から最下層まで、時と所をとわず、阿片が吸われている」という「事実」は、書き方次第によって、中国人がもはや自立の能力を失い、あたらしい文明によって征服され、支配され、蘇生させられるにふさわしい民族であるというイメージを強める。阿片という有名で通俗化した主題は、たんにエキゾチスムの道具立てや文学的な風味にとどまらず、植民地支配の必然性を側面から、しかし、心理的に強力に納得させてゆく影響力を秘めている。

その他、オリエンタリズムを構成するどのような要素が、植民地主義を補強しているの

ろうか。それを詳しく考察しようとするならば、わたしの研究テーマはすこし変わらざるをえないのみならず、調査の範囲はいっそう広がり、もはやわたしには研究を完成させられなくなるであろう。しかしながら、19世紀から20世紀初頭のオリエンタリズムを植民地の獲得と支配の潮流とまったく無縁であるかのように扱うことはできない。文学が人間に働きかける強力な作用は、社会や国家の動きにも影響してゆく。すくなくとも、フランス文学がフランスの植民地をどのように描いているか、その常識くらいは勉強しておかなければならない。また、それならば困難ではない。たとえば、プリヨロやルブロンやバルキソーが編んだ選集によって、¹⁷⁾ 語法や描写の方法や論法について基本的な理解を得ることができる。さらに、それらは大航海時代叢書にあらわれているのと同じくしているものも少なくないようである。この叢書についての以前の分析も利用できるにちがいない。

すこし視点を変えて言い直すならば、日本はオリエンタリズムの客体ではあるが、植民地主義的オリエンタリズムにおいては、欧米とともにそれを利用する主体であった。とするならば、中国についての文学作品を補完的に資料にくわえようとするのは、考えが単純すぎるとも言えよう。少なくとも、日本と中国とはまったく逆の位置を占めていた側面をも忘れないようにしながら、作品分析をすすめるなければならない。先ほどのべた基本的な理解は、このような注意をくばることができるようになるのにも役だつであろう。

最後に、年代と傾向の異なる二つの作品を簡単に分析しながら、研究の構想とテーマについての説明をつづけよう。

一つはジュディット・ゴーチエの『微笑を売る女』¹⁸⁾ をとりあげてみよう。これは5幕の散文劇で、1888年4月21日にオデオン国立劇場で初演された。シュウォーツによると、上演は大成功で、同年のあいだに55回公演され、翌年にも再演された。¹⁹⁾ ちなみに、本職の3名の芸者が初めてパリにやってきて評判になったのは、1867年の万国博のときであった。彼女らは会場につくられた茶屋に座り、着物姿で茶をたて、見物客に供した。

まず劇の内容を略述しておこう。(第1幕)江戸に屋敷をかまえている金持ちの日本人(さらに正確な身分は判断しがたい)ヤマトは、遊女「ルビーの心」を身受けし、自宅に住ませる。妻オマヤは堪えられず、心痛のあまり死ぬ。(第2幕)「ルビーの心」は金を盗み、屋敷に放火したのち、避難するヤマトを恋人のシマバラに殺させる。一緒にいた子供のイワシタと乳母のチカは殺人現場に残され、通りがかったマエダ侯がイワシタを養子として貰うける。(第3幕)23才になったイワシタが恋仲の隣家の娘「葦の花」と庭であいびきをしている。そこへマエダ侯が旅から帰ってきて、イワシタの家族の過去を教える。そして、仇討ちの旅に出るよう勧める一方、留守の間に「葦の花」との結婚をまとめておくことを約束する。(第4幕)ヤマトの屋敷の跡に建てられた旅籠の前で、乞食におちぶれたヤマトと鳥追になっているチカが

出会う。旅籠に泊まっていたイワシタも二人と再会し、チカから敵の名前を教えられ、隣家の夫婦であることを知る。イワシタは動転しながらも、父と乳母にむかって、シマバラはすでに死んでいるが、「ルビーの心」には復讐をはたと約束する。（第5幕）婚礼の準備がととのえられているマエダ邸に、父と乳母とともにイワシタが帰ってくる。チカはイワシタに脇差しを差し出し、目の前にいる敵に裁きをくたせとしきりに促す。イワシタと自分の娘が悲しみ、苦しむ光景を前にして、「ルビーの心」は畳に落とされた脇差しで自害する。

以上のような劇が、もちろん、フランス人の役者によって演じられた。細部にはいくつも奇妙なところがないわけではなく、感情の高揚した場面には、むしろギリシア悲劇あるいはフランス古典劇に近いのではないかと感じられる科白もまじっている。しかし、全体としては、けっして粗雑ではなく、悪いできばえではない。実際に舞台を見ていないので断言はできないが、作品として読んだかぎりでは、まぎれもなく日本劇であり、日本にたいする関心や知識が、一部の人たちにおいては相当に進んでいたことを想像させる。

しかし、この劇には、日本や日本人を定義づけようとする欲求は希薄である。作者は観客に日本の文化を感じさせることに満足しているようである。筋立ては、女に狂って身を滅ぼす男にしる、超越的な運命に苦しめられる恋人たちにしる、西洋の古典劇にも民衆劇にも見られる。装飾と衣装を除けば、中身に特別なところはなく、作者もそれ以上に日本や日本人の特徴を印象づけようとはしていない。韻文のプロローグを書いたアルマン・シルベストルも説明しているように、²⁰⁾このような悲劇はどここの国の人間にもおこりうるものであり、作者も同じように理解していたからなのであろう。

しかしながら、オリエンタリズムに通じる要素がないわけではない。ヤマトは遊女にのぼせたあげく、自宅に住ませる。それは、ヤマトによれば、自分の権利の行使にすぎないのであり、裕福な身分の者で、家に一人しか妻をもっていないのは、日本でおそらく自分だけだからである。²¹⁾オマヤの方も、遊女が連れてこられたのでなかったならば、諦めて妻の義務に従い、²²⁾仲よくしたであろうに、と嘆く。作者のゴーチエはイスラムの一夫多妻制と混同しているのかもしれない。それはありえないわけではない。しかし、19世紀ラルースの「JAPON」のところには、つぎのような説明がある。「日本人は妻を一人しかもっていないが、絶対的な権力をふるっている。たんに不貞が疑わしいだけで、夫は妻を殺すことができる。さらには、妾を何人でも好きなだけ夫婦の住居に入れることができる。修正のためにつけくわえるならば、夫は家に入れる美女の全員について妻に相談し、妻は、慰めとして、新しく来た女たちを支配し、主人として命令をくださるの喜びとする」。²³⁾

さらには、背景にある、観念の社会的な文脈として、同じラルースの「ORIENT」に見られる、次のような理解の仕方がからんでいるにちがいない。「人種と言語から国家へ目を移すならば、多様性がさらにいっそう顕著になる。政治組織もほとんど同じように相違が著しい。

しかし、オリエントで一般的に、ほぼ例外なくそれが帯びている性格として、神権政治的専制を指摘できる。この政体の下にかつて古代エジプトや古代ユダヤ王国が存続し、今なおトルコ、ペルシャ、中国、チベットなどが喘いでいる。日本は、進歩の歩みにおいて一度ならずオリエントの頂点に立ったが、最近かろうじてそこから解放されたばかりである。しかしながら、この視点の他には、オリエントにおける政治組織を一般的に定義することはできないであろう²⁴⁾。一言つけくわえるならば、事典のこの巻が発行されたのは1874年であり、明治維新の6年後である。

また、上の二つの引用によって、この事典を誤解しないでいただきたい。日本についても、オリエントについても、西洋の価値判断を強く表現した批判的な記述は上の2箇所だけであり、例外的である。しかし、それはまた、そこにふくまれている知識や固定観念が強くフランス人をとらえていたことをも意味しているであろう。グロリシャールが言っているように、モンテスキューが『法の精神』において専制政治をアジア的特性として決めつけて以来、この説が人々を縛りつづけたのかもしれない。その呪縛力は、もちろん、自己とは反対の性格を強調する対比によって成立しているのであり、西洋は民主主義的市民社会をつくりあげてきたという自負によっていっそう強められたにちがいない。あるいは、自負するところが現実には不完全で、まだ欠陥も少なくないのを覆い隠すため、西洋の民主政治-オリエントの専制政治という対比がより強調されたのかもしれない。オリエンタリズムはオクシダントリズムの裏返しであるという仮定は、多くの分野において有効な検討の視点である。

知識と観念の、以上のような社会的文脈と触れあったとき、ヤマトとオマヤの悲劇はオリエンタリズムの特性を帯びてくる。作者が意図していたかどうかにかかわらず、劇を見ているフランス人観客の内部では、プロローグがのべているような普遍性が後退し、国の文化のからだ特殊な反応が生まれる。ヤマトはたんに遊女に狂った男ではなく、オリエント的専制の具現者である。ヤマトとオマヤは、夫が絶対的な権力をふるい、妻がひたすら忍従する、オリエント的夫婦関係を証明する存在であり、オマヤはオリエント的な犠牲者である。舞台は同時代を支配していた、知識と観念の社会的文脈にふさわしい色合いで照らされる結果、『微笑を売る女』は、たんに江戸時代を題材にしたエキゾチスムにとどまらず、オリエンタリズムの伝統的な観念の一つをふたたび強化したにちがいない。

つづいてクロード・ファレールの小説『戦争』(1909年出版)を見てみよう。バルチック艦隊を破った海戦の前後における長崎が舞台であるが、登場人物の国籍は多様である。フランス人画家フェルツは富豪のアメリカ人女性とヨットで暮らしており、ちょうど長崎に来ている中国人高官チュウ・ベイとは旧来の友人である。日本人の中心人物ヨリサカ侯爵夫人ミツコは、夫の親友であるイギリス人海軍士官に思われており、また、ある日はイタリア人の貴公子に誘惑されそうになる。したがって、この小説には、欧米の国々の国民像も描かれていて興味ぶかい

のであるが、しかし、オリент以外の要素は省略することにしよう。

まず先に中国人チュウ・ペイについての検討を済ますことにする。彼を敬愛しているフェルツは小説のなかで3度彼の私宅を訪れる。そのいずれの時も、二人はたっぷりと阿片を吸いながら雑談する。阿片を吸う道具や吸い方や煙がたちのぼる部屋などの描写は、二人の話の内容に劣らないほど重要な要素になっている。『80日間世界1周』（1873年出版）を例にあげながらすでに言及したように、それは以前から強調されている中国イメージである。ちなみに、ファレールは『阿片の煙』（1904年出版）と題した散文物語集も書いている。これについては、やがて稿を改めて分析するであろう。

では『戦争』においては、阿片はどのようなイメージと結びついているのであろうか。部屋のカーテンを閉め切って外部の光を遮断し、9個の紫の角灯がそぐスタンドグラスの輝きにつつまれた阿片の「王国」には、人生の粗暴なものが追放され、限りない平穏がおとずれる。激しく空虚な情念から解放された、穏やかな、思慮深い、超越的な世界が開けてくる。作者がこのように描写している箇所があるが、それは古い歴史をもつ中国の智慧の特徴と似通っている。たとえば、日露戦争の日本の勝利についてチュウ・ペイがフェルツにのべた意見を見てみよう。²⁶⁾

力にたいして力で対決するのは、荒廃と野蛮を生み出すだけである。無益で血塗られた戦争をするあらゆる国民は、古来の智慧を捨て、文化を否定する。野蛮な新しい日本が野蛮な新しいロシアを破ろうと破るまいと、なんら重要なことではない。大切なのは礼であり、温・良・恭・儉・讓の五徳であり、仁・智・勇の必須三徳である。天子から庶民にいたるまで各自がこれらを守り、実行するならば、帝国が勝とうと負けようと、なんら重要ではない。もし国が征服されるならば、古来の教えという貴重な液を蓄えている瓶が割れるに等しいではないか、と恐れるにはあたらない。古来の教えは不死であり、帝国のような滅ぶべきものと結びついているのではない。礼を重んじ、諸徳を実行した国民が打ち破られたとしても、すばらしい模範は人々の記憶のなかに生き残り、敵さえも敬服し、見習わざるをえない。こうして古来の教えは甦り、若がえる。しかし、反対に、一時的な利益やつかの間の成功や華々しい栄光のために道をそれる国民は、甚しく評判と名誉をそこない、汚れた記憶を歴史に残し、30代も60代も後の世代の国民までも腐敗させる。

古典や故事を引用しながらチュウ・ペイがこのような意見をのべるのは、常に枕に横たわって阿片を吸っている場面である。中国古来の思想はまったく阿片と一体になって提示されている。それは読者にどのような作用をおよぼすであろうか。それを論じるのはこの稿では省略するが、前者が後者とは無関係に紹介されるのとは、大きな相違があるにちがいない。無視できない意味作用の変化が生じるのはまちがいないであろう。

『戦争』はただ日本や日本人を描くのではなく、外国人の登場人物と触れあう度に、それら

の諸側面があらわれる結構になっている。つぎに、外国人登場人物のなかの主人公である、フランス人画家フェルツについて検討してみよう。

彼が愛しているのは、浮世絵に描かれた時代の日本であり、日本人である。それは小説の最初の場面ですでに明らかになる。ヨリサカ侯爵夫人ミツコの肖像画を依頼され、彼はヨリサカ邸を訪れる。彼が通されたのは、流行にあわせた、エレガントな洋風の居間である。しかし、それはパリから3000里離れた土地以外では、陳腐きわまりないものである。過去において独自の文化を形成しながら、行き着いたのは剽窃と猿まねにすぎない。現在日本文化を脅かしているのは、ロシア艦隊ではなく、平和な侵入者である「白禍」なのであろう。

新しい日本と接触した、フランス人画家の最初の感想は、以上のようにまとめることができる²⁸⁾。明治維新の以前と以後を対比的に区別した、このような評価の仕方はすでに定着していたようである。たとえば、前述の『微笑を売る女』においても、それがプロローグの日本紹介の最後をしめくくっている。鎖国の壁が崩壊した後の日本は、西洋を愛し、西洋と同じようになろうとするあまり、もはや自分自身であろうとするのを忘れてしまった。新しい日本をつくるために、常規を逸した錯乱におちいり、かつての詩情と魅力の根源をすべて捨て去ろうとしている。このように歴史をまとめた後、プロローグは江戸時代の愛の物語を最後の花として味わうように勤める。さらには、もしこのような人々がいなくなったとしても、それは西洋を愛するあまりであったのである、と観客にむかって寛大な評価を訴える。年代を復習するならば、この劇が上演されたのは1888年、明治維新の20年後、『戦争』が出版されたのは1909年、日露戦争の5年後である。

ヨーロッパ人が明治維新以降の、いわゆる文明開花の系統の文化を嫌い、古い日本にしか興味をしめさないとしても、かれらを買めることはできない。文化の鑑賞という次元では、それは当然である。しかしながら、その観点による批判はしばしば単純で無責任なエキゾチスムにすぎず、世界の歴史の流れに揺すぶられている現実の日本を見ようとはしていない。たとえば、オリエントにたいする評価の仕方においても、一方には「停滞」とか「無気力」というレッテルが待ち構えている。これらはすみやかな改革を果たせなかった多くの国々について言われているオリエント的特性であった。日本が過去の自己自身にとどまりつづけたならば、「剽窃」や「猿まね」の嘲笑は免れたとしても、こちらのレッテルを貼りつけられたであろう。

『戦争』のなかのフェルツは、最初は、上にのべた日本観をいさぐ。しかし、彼はステレオタイプな文化論をおし通し、それですべてを裁こうとはしていない。そこに、作者フェレルの広さがある。文学的な叙情性においてはビエール・ロチに劣っていると看做しても、歴史の流れのなかにおける人間と国家を感じさせ、考えさせる点においては、ずっと深みがある。『戦争』は、オリエントをヨーロッパ人の自己本位の文学性の材料にしているだけではない、多様な視点からの記述をふくんでいる。

フェルツが長崎に着いて最初に訪問したとき、チュウ・ペイは、ヨリサカ侯爵が先祖代々の精神にたいする敬愛をなおざりにしている、夫人ミツコが女性としての慎みを忘れていて、ふたりの家庭がたくさん新しいもののために無分別に伝統を捨てている、と批判する。そのときフェルツが質問し、チュウ・ペイが答えた内容はつぎのように要約できる。「祖国を侵略から守るためならば、ふたりのような態度も許されるのではないだろうか。帝国という瓶が割れてしまったならば、中に蓄えられている先祖代々の智恵という貴重な液も消えてしまうのだから」——「ふたりに有罪や無罪を宣告するつもりはない。しかし、みずからが歪みながら、他を改めた者はいない。みずからが名誉をおとしめながら、帝国を改革した者はいない」「では日本人の努力は無益なのであろうか。日本はロシアに負けるしかないのであろうか」——「わたしには分からない。しかし、そんなことは重要ではない。この問題については、しかるべき時がきたら、ゆっくりと話そう²⁹⁾」。

上のようなフェルツの主張は全面的に正しいわけではない。しかし、苛酷な歴史の流れのなかにある人間と国家について、一度は考えてみなければならぬ論点である。このように視点の転換に心がけている作者の柔軟性は、さらに、次のような珍しい記述を生んでいる。いずれも短文であり、多くの読者には平凡なように感じられ、注目されないかもしれない。しかし、実際には、外国についての記述に意外なほど欠けている反省的思考なのである。ひとつはヨリサカ夫人とその居間の欧化ぶりを批判した後に記されている。そこでフェルツは、自分が観察したことを日本に特有の現象として解釈しようとする傾きを自制する。数世紀来の平均化する歴史の力が、人種の特徴や地方的、国民的伝統を消し去っている流れに思いをめぐらしつつ、その影響をうけた国際的文明人の家庭としては、ごく普通の、ありふれた姿ではないだろうか³⁰⁾と反省する。他のひとつは、日露戦争についてチュウ・ペイの意見を聞いたのち、フェルツが長崎の町を歩いて行くところに挿入されている。日本海海戦の大勝利に熱狂している人々を描き、日本人らしい慎みも節度も捨て去って喜びをあらわしていると指摘したのち、「西洋の群衆が喜びをあらわすのとはほとんど同じように³¹⁾」と付記している。これら二例のように、外国についての観察を特殊化しようとする欲求を、世界全体についての共通した視点を導入しながら抑制する思考法は、文章に記されると凡庸なようであるが、実際には珍しく、貴重である。この時代においても、大航海時代叢書においても、現代においてさえも、見出しがたい柔軟性である。

ヨリサカ夫妻の交友として、さらにイギリス人海軍士官とアメリカ人富豪女性を配している小説の結構も、新たな視点の導入に成功している。前者とヨリサカ侯爵との会話は、随所で、西欧を師と仰ぎながら、和魂洋才、脱亜入欧の思想によって富国強兵に努める、新しい日本人を描いている。後者は、電話があるかどうかを野蛮人であるか文明人であるかの判断の基準とするような、現実的で即物的な欧米中心思想を代表している。オリエントの評価の仕方にもか

わかるこのような進歩観も、世界を動かしている一要素であるのはまちがいない。

以上の簡単な分析からだけでも推察できるように、『戦争』は素朴なオリエンタリズムを越える多様な視点によって日本と日本人を描くのに成功している。しかし、この作者にしてさえ、時代と社会の誘惑に負けている。陳腐で典型的な一要素を不必要に導入している。それは切腹、ハラキリである。

ヒラタ子爵はロシア艦隊の砲弾によって戦死したヨリサカ侯爵に代わり、りっぱに自艦を指揮し、東郷元帥からの賞賛もうける。ところが彼は戦死者たちを葬ったのち、艦の一室で、部下に介錯をさせ、切腹する。その理由は、戦闘が始まる前にヨリサカ侯爵の方から誘った、新旧の日本と日本人についての論争における無礼と不明をわびるためである。作者ファレールは、必然性に欠けているにもかかわらず、日本海海戦をハラキリで結ぶ誘惑に勝てなかったであろう。また、わたしの持っている前述の版では、『戦争』はIからXVIの表記によって分けられ、内容の一部をあらわす挿絵が各数字の上に入れられているが、VIにあるのは、甲冑を着たサムライの時代の戦闘場面である。きわめて比喩的な意味によってしか内容と関連がなく、他の15の挿絵の原則にまったくそむいている。つまり、サムライとハラキリというイメージは、小説の他の箇所が証明している、作者の豊富な知識と冷静な認識によって制御されていない。いずれの場合も、よく知っていたかどうかだけが原因ではないように思われる。感情と非論理性へのこの屈服は、これらのイメージの呪縛力がファレール個人のみならず、社会と時代を共有する多くの人々にも及んでいたことを想像させる。

辞書によれば、³³⁾ 切腹がハラキリという語でフランス語のなかに入ったのは、19世紀ラルースのJAPONの項が最初であり、この巻の出版年代は1873年である。一方、塩谷氏の研究によると、³⁴⁾ 1868年の堺事件において11人の日本人兵士が切腹したのを目撃したフランス人海軍士官たちは、強い衝撃をうけ、このおぞましい自殺の方法についてパリの全紙に語っているという。今わたしが指摘したファレールの選択も、それ以降つづいている、観念の社会的文脈あるいは連鎖様式を証明していると言えよう。

結論としてまとめなおすならば、クロード・ファレールの小説『戦争』は、「サムライ」と「ハラキリ」というジャポニスムの要素については、安易に固定観念を利用している。それを欠点として批判できないわけではない。しかしながら、全体的には、視点を柔軟に変化させながら、いろいろな側面から日本と日本人を描くのに成功している。それはけっして些細な長所ではない。個々の部分は一流作家に匹敵する独創的な把握や表現には到っていないとしても、どの側面にも片寄らず、それぞれを上手にからませ、全体として深みのある作品になっている。視点を変化させるなかで、東洋と西洋を同じ次元に置きなおよす思考さえ生みだしている。外国にたいする認識という基準から評価をしなおすならば、ピエール・ロチの日本に関する作品より優れている。しかし、一般に文学作品というものにたいする評価において、対象の全体的な

認識などはほとんど考慮されない。作者と対象とが好悪の感情でもっとも鮮烈にむすびついている一面を巧みに、力強く表現した、個性的な魅力が重視される。外国を題材にした作品であっても同様である。作者の感情がもっとも強くからんでいる側面を描く表現力が、人の評価を呼ぶ。よく似た感情を共有している読者も、それに左右され、影響される。文学作品にたいする評価のありかたをあまりにも手短に、あまりにも単純に論じたが、しかし、対象にたいする全体として妥当な認識などという基準は、まるで文学に反するかのように排斥されているのは確かであろう。

オリエンタリズム小説はヨーロッパ人の感情の表出にすぎないと見なすのが社会的な常識であるならば、文学史の上で二流、三流の作家と作品を研究する意味はないであろう。しかし、実際には、それは外国にたいする正しい認識であるかのように、社会にたいして作用する。いや、むしろ、知識や認識の普及と固定観念化においては、論文や歴史書以上に強大な影響力をもっている。さらにまた、一方では、文学作品にふくまれている諸要素は、時代々々の国家的、社会的な欲求によって照明があてなおされる。どのようなイメージやどのような観念がもっとも普及し、もっとも優勢になるかは、文学作品を越えた外的要因にも左右される。たとえば、日露戦争に日本が大勝利をおさめたのち、フランスでは日本の文化にたいする関心が高まる一方、日本がアジアの主導権を奪うかもしれないという不安が黄禍論をふたたび登場させる³⁵⁾。このような社会的潮流のなかでは、『戦争』は、いろいろな視点から歴史と国家と人間を読者に考えさせるようには働きかけないかもしれない。ハラキリをするサムライというイメージがもっとも印象ぶかく心に残るだけかもしれない。文学作品と社会との係わりが多かれ少なかれ研究テーマに関連するならば、このような微妙さと複雑さも念頭に置いておかなければならない。

19世紀フランス文学におけるオリエンタリズムというテーマは、したがって、たんに文学作品の研究なのではない。フランスという国と社会の精神史の研究でもある。そこに興味ぶかい発展の可能性もあれば、大きな困難もある。しかし、それは試みるに値する未開拓のテーマである。現在ではほとんど忘れられているフランス文学の一分野の調査というのみならず、文学の働きというものの再検討においても、現代をも支配している観念の複合体を見つめなおす上においても、重要な意味をふくんでいる。もちろん、理想的に遂行しようとするならば、調査、分析しなければならぬ資料は膨大であり、わたしには不可能に近い。しかしながら、ここにのべたような構想に注意しながら進めるならば、研究がその一部分にとどまったとしても、それなりに意義のある成果は得られるにちがいない。

注

- 1) MAUPASSANT (Guy de). *Ecrits sur le Maghreb*, présentation par Denise Brahimy,

- Minerve, 1988.
- 2) *Dictionnaire universel du XIX^e siècle* の Orient の項参照。
 - 3) G・B・サンソム著, 金井・多田・芳賀・平川訳『西欧世界と日本』, 上下巻, 筑摩書房, 1966.
 - 4) BALARD (Michel). *L'Orient : concept et images dans l'Occident médiéval*, in *CIVILISATIONS N°15* (XV^e colloque de l'Institut de Recherches sur les Civilisations de l'Occident Moderne), Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 1988.
 - 5) MARTINO (Pierre). *L'Orient dans la littérature française au XVII^e et au XVIII^e siècle*, Hachette, 1906, pp.136 - 137.
 - 6) Ibid., pp.138 - 139, pp.150 - 151.
 - 7) NOUTY (Hassan El). *Le Proche-Orient dans la littérature française de Nerval à Barrès*, Nizet, 1958.
 - 8) GROSSIR (Claudine). *L'Islam des Romantiques*, Maisonneuve et Larose, 1984.
 - 9) MARTINO, ouvrage cité, p.152,
 - 10) FARRERE (Claude). *La bataille*, Arthème Fayard, 1940.
 - 11) LIAUZU (Claude). *L'Islam de l'Occident*, Arcantère, 1989.
 - 12) REIG (Daniel). *Homo orientaliste*, Maisonneuve et Larose, 1988.
 - 13) SCHWARTZ (William Leonard). *The imaginative interpretation of the Far East in modern French literature 1800-1925*, Honoré Champion, 1927.
 - 14) エドワード・サイード著, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』, 平凡社, 1986. サイードのオリエンタリズムの定義と研究方法については「序説」を参照のこと。
 - 15) BRAHIMI (Denise). *Pierre Loti, du roman exotique au roman colonial*, in *Le roman colonial*, L'Harmattan, 1987.
 - 16) VERNE (Jules). *Le tour du monde en 80 jours*, Collection Hetzel, Hachette, 1977, p.135.
 - 17) PRIOLLAUD (Nicole). *La France colonisatrice*, Liana Levi, 1983.
LEBLOND (Marius-Ary). *Anthologie coloniale*, J. Peyronnet et Cie, Editeurs, 1943.
BARQUISSAU (Raphael). *L'Asie française et ses écrivains*, Jean Vigneau, 1947.
 - 18) GAUTIER (Judith). *La marchande de sourires*, G. Charpentier et Cie, Editeurs, 1888.
[8° Yth. 23059] わたしの研究対象である文学作品の多くは, 現代では購入がむづかしい。1990年4月から翌年にかけて滞在したとき, バリの文学関係の古書店はすべてまわってみたが, 探していた内の一部しか手に入らなかった。残りはバリ国立図書館でコピーしたものであり, 参考のため, [] のなかに分類番号を示した。
 - 19) SCHWARTZ, ouvrage cité, p.55.
 - 20) GAUTIER, oeuvre citée, pp.8-9.
 - 21) Ibid., p.17.
 - 22) Ibid., p.23.
 - 23) Ouvrage cité, quatrième colonne, p.898.
 - 24) Ibid., première colonne, p.1464.
 - 25) GROSRIECHARD (Alain). *Structure du sérail. La fiction du despotisme asiatique dans l'Occident classique*, Editions du Seuil, 1979, pp.39-40.
 - 26) FARRERE, oeuvre citée, p.129.
 - 27) Ibid., pp.130-132.
 - 28) Ibid., pp.11-15.

19 世紀フランス文学におけるオリエンタリズム (研究序説)

- 29) Ibid., pp. 32 - 34.
- 30) Ibid., p. 17.
- 31) Ibid., p. 137.
- 32) Ibid., pp. 107 - 112, pp. 122 - 126.
- 33) *Grand Larousse de la langue française*, Librairie Larousse, 1972.
- 34) 塩谷敬『シラノとサムライたち』, 白水社, 1989, p. 13.
- 35) SCHWARTZ, ouvrage cité, pp. 151 - 158.